



笑う仕立屋

11月1日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

11月1日のおはなし「笑う仕立屋」

村の生活にもすっかり慣れた。とまどったのは最初のうちだけで、ここでの暮らしは肌になじむようだ。テンポが合っているのか、価値観に共鳴できるのか、そのあたり、詳しく考えたわけではないが、とにかくここでの暮らしは気持ちがいいし、苛々を感じることもまずない。

正直に告白すれば、都会生まれの都会育ちの自分にとって、村の生活はもっとストレスだらけだと思っていた。詮索好きな隣人がいたり、過剰な世話焼きをされたり、刺激のない時間がまったりと続いたり、逆に手を動かさなくてはどうにもならないことに忙殺されたり、人付き合いやら、家事やら耕作やら、これまでやったことがないことをたくさんする羽目になるのだろうと覚悟していた。

そしてそれらは予想通りというか、予想以上にたっぴりあった。朝早く起きて土が熱を持ちすぎないうちに水をまき、雑草をむしり、虫をとり、かかしを調節し、それからやっとな朝食を作り、午前中に洗濯物まで済ませる。午後は近所の人と情報交換だ。気になることがあればお互いの畑や菜園を訪れ合って、ああでもないこうでもない議論する。取れたての野菜を交換したりするのもこの時だ。

作物の話をし、家畜の話をし、育児の話をし、教育の話をし、義父と義母の話をし、隣人の話をし、日が暮れていく。必要があるときは仕立屋に行き、必要なだけの服を仕立ててもらおう。仕立屋も必要なだけの服しか作らない。たくさんの服がぶら下がるようなお店はここにはない。仕立屋にしても仕立てだけでなく、つくろいもする。機嫌良く、笑いながら。そういうこと全てが、いまとてもしっくりくる。

ここに来て最初に泊まった宿は、一階が食堂兼居酒屋で村人の社交場になっている。一日の作業を終えた人々が集まり、作物の話をし、家畜の話をし、育児の話をし……そしてちょっと奇妙な体験談を披露し合ったりする。なあ、おいあんだ。と、仕立屋が言う。あの洞窟がどうなったか知っているか？ 洞窟？ ああそうさ。あんだ、あそこを通ってきたんだらう？ 私が？ 洞窟を？ 自分では全然覚えていないのできょとんとする。

男は豪快に笑う。きょとんとした顔をしているな。おいおい、しっかりしろ。でなけりゃあんだどこから来たのさ、ここに。言われてみればなるほど自分はどうやってこの村にたどり着いたものやらとんと思ひ出せない。電車は走っていないし、車も見かけない。徒歩で来たのか、どうやって来たのか。悪いんだがその洞窟、案内してもらえないかな？ え、洞窟を？ よしたほうがいいよ。いや、でも気になるから。

翌日、仕立屋に案内してもらって洞窟に行く。しばらく中に入って行くが、意外なことに奥に進んでも、何かに照らされているように全体が妙に明るい。その明かりのせい、全体に赤みがかった黄色っぽい色に見え、壁面は滑らかで湿って見える。入ってきた入り口の方を振り向いたとき、案内の仕立屋がいないことに気づく。あっと思う間もなく、洞窟の入り口は閉ざされ村の姿が見えなくなる。自分はそのまま後ろ向きにぐいぐいと、洞窟の奥へ奥へとひきずりこまれていく。遠ざかっていく。村がどんどん遠ざかっていく。

* * *

「ひょっとして、寝てました？」

「え？」

と、声を出そうとする。声が出ないのであせる。喉が異物でつまった感じだ。自分はベッドに横向けに寝ており、目の前のモニターの中に洞窟がとじ込められている。喉に違和感を覚え、空えずきをする。喉が痛い。

「はい、落ち着いてください。大丈夫。もう出ますから」

モニターの中の洞窟は自分の食道であり、喉であり、口の中であることがわかり、自分はようやく本当に目が覚める。医師が笑う。

「胃カメラ飲みながら眠る人なんて初めて見ましたよ」

頭の中にはまだ村の生活の残滓が残っていて、あそこに戻るにはどうすればいいのかせわしく考えている。今日はまだ畑仕事をしていないんだ。

「ああそうか、説明している間、寝ていたんですよ」医師は豪快に笑い、続ける。「大丈夫ですよ。綺麗なもんです。何も問題はありません。ストレスのかけらも見当たりませんでした」

その笑い声を聞いて、仕立屋はどうしただろう、無事だったろうかと考える。

(「胃カメラ」 ordered by こあ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じをご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ほくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

笑う仕立屋

<http://p.booklog.jp/book/37290>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37290>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37290>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.